

シンポジウム

「トロイア戦争の物語と英雄たち」

司会・趣旨説明

芳賀 京子（東京大学）

報告

長田 年弘（筑波大学）

北見 紀子（東京大学）

上野 慎也（共立女子大学）

栗原 裕次（東京都立大学）

コメント

芳賀 京子（東京大学）

古澤 香乃（東京都立大学）

高島 純夫（東洋大学）

田中 一孝（桜美林大学）

全体討論

2024年6月2日（日）

日本西洋古典学会 第74回大会

共催：神戸大学、ギリシャ大使館

於 神戸大学百年記念館

(趣旨説明)

芳賀 京子 (東京大学)

日々報道されているウクライナやパレスチナの状況は、戦争やそれに伴う残虐行為が決して過去のものではないことをわれわれに突きつけた。はるか遠い世界の物語であったトロイア戦争はこれまでにないリアリティーを帯び、数々の悲劇はいつそう痛切に胸に迫るようになった。戦争を身近に感じるようになってはじめて、われわれはトロイア戦争が人類の歴史に普遍的な経験と感情に根ざした物語であることを思い知らされたのである。

では、古典期のギリシアや帝政期のローマの人々は、トロイア戦争の物語をどのように認識し、記憶し、表現したのか。彼らにとって英雄とは、英雄的行為や残虐行為とは何だったのか。文学と美術ではおのずとテーマや表現方法に違いがあるだろうし、トロイア人を祖先とみなしたローマ人や、その影響下にある人々の興味や関心のありかは、古典期のアテネ人とは異なっていたはずだ。トロイア戦争の英雄たちにしてもその捉え方はさまざまで、評価基準が変化することもあっただろう。シンポジウムでは、哲学、歴史学、文学、美術史学の視点を交錯させることで、同一の戦争に対する古代人の多元的な解釈を提示し、古典学学究の徒として戦争というものを今一度、考えてみることにしたい。

(報告要旨)

女性、子供、老人の聖域避難
—美術に見るトロイア神話—

長田 年弘 (筑波大学)

古代ギリシア美術は、前 6 世紀頃から主題が多様化し、英雄や神々の功業だけではなく、女性や子供、老人の悲劇的な運命を表すようになった。本発表においてはトロイア戦争に取材する三つの主題を紹介する。

「アイアスによるカッサンドラ暴行」は、アイアスとアテナ女神像の対決を描写する構図によって繰り返し表現され、犠牲者となるカッサンドラは、しばしば、聖域に立つ女神アテナの彫像に抱きつくようにして神に嘆願する様子で表される。「ネオプトレモスによるプリアモス王とアステュアナクスの殺害」は、初期の作例においては王の殺害が単独で表され、後に、孫のアステュアナクス殺害が同一の画面内に付加される。老王は必ず、神域内の祭壇に座る姿で表される。三つめは、「アキレウスによるトロイロス殺害」である。

三つの主題は、いずれも聖域での出来事を描いており、犠牲者となる女性、子供、老人の庇護権 (asylia) の問題を共通して扱っていたように思われる。美術作品において、カッサンドラとプリアモスは、ほとんど必ず手の平を上に向けて攻撃者に差し出す特

徴ある仕草で表される。これは、嘆願 (hiketeia) を意味する身振り言語である。なぜ前 6 世紀中葉以降に、非戦闘員の避難権を扱う美術の作例数が特に増えたのだろうか。影響力が大きかった事件のひとつは、前 7 世紀のキュロン反乱の挿話であったと思われる。ヘロドトス等は、キュロン事件においてアルクマイオン家が被った呪いと汚名が、前 6 世紀末の政変において、なお激しい非難の応酬をもたらしたことを伝えている。同じ穢れの伝承は、前 6 世紀をこえて、遠く古典時代まで影響を及ぼし続けたという。

三つの主題は、ペイシストラトス家の時代に数が増えている。クレイステネスの活動時にも、美術作品を見たアテナイ人は、例外なく同時代の政治的争点を思い起こしただろう。美術作品は、神話の一般的な描写を意図しており、必ずしも、誹謗の相手を持定できるような政治的中傷のために描かれたのではなかっただろう。しかし、その鑑賞体験は、同時代の政争を思い起こさせるものだった。陶器画の図像が表す傲慢の罪は、鑑賞者に畏怖の感情を惹起し、子孫にとっても永遠に穢れとなる重大な違犯を喚起したと思われる。また、ヒケテアの主題は、古代ギリシア人が戦禍における非戦闘員の庇護権をどのように理解していたかを推量しうる事例と考えられる。

英雄的行為と残虐行為の境界線 —帝政期の詩人が描いたトロイア戦争—

北見 紀子 (東京大学)

クイントス・スミュルナイオスは長編叙事詩『ポストホメリカ』でトロイアの陥落を描いている。同じくトロイア戦争を扱った他の作品と比べて大きく異なるのは、ネオプトレモスの人物像である。ネオプトレモスはポリテス、プリアモス、アステュアナクス、ポリュクセイネ等、トロイア王家の者たちを惨殺したことで知られるが、クイントスは叙述や話のディテールを操作して、なるべく残酷な印象を持たせないようにしている。これはなぜであろうか。一般にクイントスの作品の登場人物は他の作品に比べて道徳的に描かれる傾向にあるが、ネオプトレモスにおいてそれが顕著に表れるのは、上にあげた行為が残虐とみなされたからではないかと思われる。

英雄叙事詩において、戦場で敵を倒すのは英雄的行為である。いわゆる「アリストイア」には敵を殺す描写があふれている。しかし、敵とはいっても弱者を殺すのは(少なくとも)クイントスの価値観においては残虐行為と感じられたのであろう。では、弱者とは誰をさすのか。プリアモスに代表される老人、アステュアナクスに象徴される幼児、ポリュクセイネをはじめとする女性がかこれにあたる。ウェルギリウス『アエネイス』ではポリテスは武器をもたぬままネオプトレモス(ピュロス)に殺されるが、これも幼児の延長線上にあると考えられる。

ここでもう一つ考えたいのは、戦闘員ではない一般市民についてである。『ポストホメリカ』第 13 巻ではトロイアの市民がギリシア軍の襲撃を受ける様子がリアルに描か

れているが、彼らの受けた被害は残虐行為の範疇に入るのだろうか。

一般市民の描き方の特徴は、人名がないということである。固有名詞があっても「トロイア人」だけであり、この点は、どんな端役でも名前が明記されている一騎打ちの場面と対照的である。さらに、一般人の惨禍を描く場面においては殺すほうも名前が記されない。クイントスがアステュアナクスの殺害を記す場面で「(誰と名前を明確にしないで) ダナオイ人たちが投げ落としした」と述べていることを想起させる。このような「ぼかし効果」を取り入れる裏には、残虐行為としての認識があるように思われる。

以上の点を踏まえ、時代背景の考察も取り入れつつ、何が英雄的で何が残虐なのか、それがどう表現されているのかを考えたい。

トロイア戦争の英雄を引く文脈 ——古典期アテーナイの散文——

上野 慎也 (共立女子大学)

戦について語るのは人の性である。なにゆえ話したくなるのであろう。話してどうなるのであろう。卑近なところでも「戦後」ということばが特別の響きを持っている。人は絶えず戦争を語り、語らい続けている。

古典期アテーナイの葬送演説で年々歳々繰り返される先人の偉功、また各種弁論で引証される過去の戦捷はもちろんのこと、日常生活にあっても、細々とした戦闘をめぐって、遺族や当事者があれこれと取り沙汰をしていたに相違ない。折節『イーリアス』に耳を傾け、アキッレウスをはじめとする英雄の向背に一喜一憂しながら、トロイアの城壁を想像し、そこで展開される戦闘の情景に想いを馳せていたとすれば、戦を語ることはいよいよ身近で、日常の一部とでも形容すべき営みだったことであろう。『イーリアス』が讃仰され、伝承されたのは、戦を語る風儀があったからこそと言うべきであろうか。

戦に英雄はつきものである。『イーリアス』で頻々と用いられる「ヘーローズ」に限っても、あるいは hero と読み替えて、意味を拡張した「英雄」まで含んでも、英傑を抜きに戦を語ることは(総力戦の現代であっても)極めて難しい。後代「ヘーローズ」と「ヒーロー」とを混同するかたちでトロイア戦争(やそのほか)の英雄を取り沙汰していることもあり、トロイア戦争の英雄を議論するのは厄介である。『イーリアス』のヒーローのアキッレウスが作中で「ヘーローズ」と呼ばれることは(ほぼ)ない。それはなぜなのか。『イーリアス』の外で彼が「ヘーローズ」とされる場合、それはなぜなのか。文脈に沿って、考えてみる必要があるだろう。肩書きぬきの固有名詞が引証される場合、さらに丁寧に文脈を追いつつ、引証戦略を分析せねばならない。「英雄だから」「手本とすべきヒーローだから」「尊崇対象であるヘーローズだから」で片付けるわけにはいかない。固有名詞が担う意味を注意深く解きほぐさねばならない。

英雄に触れつつ戦を語る仕草を「古代ギリシアにおける武徳の推重と垂示の所産で

ある」と説明するのはたやすいが、「英雄」と「戦を語る」という二つの変数が絡んでいることに注意を喚起したい。函数の解明には至るまいが、変数の認知がなじみのテキストに新たな光を当てるきっかけとなり、往昔の輿論を見直す縁にでもなれば幸いである。

新しいパイデアの英雄ソクラテス —トロイア戦争の英雄たちとの彷徨—

栗原 裕次（東京都立大学）

プラトンはトロイア戦争の英雄たちを「すぐれた人間 $\acute{\omicron}\acute{\alpha}\gamma\alpha\theta\acute{\omicron}\varsigma$ 」の代表とみなしてパイデア（教育・文化）の文脈で取り扱い、人として「よく生きること」とは何かを問う。本報告はプラトンが「ギリシアの教師」ホメロスの英雄像を受容しつつ、人間の卓越性・徳の解明に向けてソクラテスをどのような英雄に造形しているのかをみていく。

最初にホメロス叙事詩の主人公を比較する『小ヒippias』を取り上げる。ソフィスト・ヒippiasは『イリアス』第9歌(309-314)を用いてアキレウスがオデュッセウスよりすぐれていると主張するが、ソクラテスは彼の徳理解が「友・味方には益を、敵には害を」といった互酬性倫理に基づくことを見抜き、英雄の徳を能力や知と結びつけて「わざと不正をする人は心ならずも不正をする人よりすぐれている」との逆説を提示する。プラトンは2人の妥協なき対話を描く中で、魂それ自体をすぐれたものにする人格的な正義と知によって、わざと社会規範や互酬性倫理などドクサに反した不正行為を斥ぶ英雄像を打ち出している。

報告の後半では、このような英雄像の源泉を『ソクラテスの弁明』に求める。哲学を諦めるか死刑かの二者択一を迫られたソクラテスは『イリアス』第18歌のアキレウスの選択を例示する(28b-30c)。短命に終わっても友の仇を討つ決断をした英雄のように、ソクラテスは哲学者として生きる決意を表明する。この決意を支える「不知の自覚」が彼の英雄性の根源であり、ここにも長生きをよしとする通念・ドクサに抗して魂それ自体を配慮し自分らしい生を貫く英雄像が見て取れる。

ソクラテスが哲学者を自認し、自他共に「知者」と認める者たちと対話するきっかけを与えたのはデルフォイの神託だった。神アポロンが彼を人格的な知の英雄に「範例 $\pi\alpha\rho\acute{\alpha}\delta\epsilon\iota\gamma\mu\alpha$ 」化したのだ(20c-24b)。ドクサの吟味からなる彼の私的な哲学対話は、「知者」の詩人や政治家が公的な劇場や民会で大衆に「教え」を垂れるのとは全く異なる新しいパイデアとなった。数多の対話篇でプラトンは師の姿を、『イリアス』第24歌で「神の如き姿 $\theta\epsilon\omicron\varsigma\iota\delta\acute{\epsilon}\varsigma$ 」を顕わすプリアモスのように美しく描き、狭隘なドクサに心ならずも縛られている読者の魂を揺るがす。主義主張で相争う人々が自発的にソクラテスの哲学対話のアゴーンと彷徨に従事すれば、私的パイデアのもう一方の担い手ソフィストの拠り所ではない、和解を願う互酬性倫理に与りうる可能性を示唆して、プラトンの英雄観の報告を終えたい。